

## ◇ 国 語

国 5-1～国 5-14 まで 14 ページあります。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

最近の小説を書く人が、あまり本を読まないという話を前に書いた。そして読まなくても書けるとも書いた。

しかし、書くことと読むこととの関係は深い。いうまでもなく読んだほうがいいのは当たり前である。はっきり断言してもよいが、その人が書けるレベルは、読んだ経験のレベルとほぼ等しいのである。

作者の質は読者の質を表している。教養や勉強のために読むのではない。小説を読むのが楽しくて仕方ない人が、やがて自分の気に入った小説を真似て小説を書くようになる。そういうものだからだ。どんな小説を読んでいたかが、書くときのソ<sup>A</sup>ジになる。

ではどうしたら読めるようになるのだろうか。

「読まねばならない」などとプレッシャーになればなるほど、いよいよ億劫<sup>おっくう</sup>になる。読書がうつつとうしい「勉強」のイメージでとらえられていると、何か読むことはア<sup>B</sup>のように思えてくる。小説を書きたいのが目的なのに、その手前に面倒な手続きがいっぱいあるような感じだ。それを手っ取り早く済ます、あるいはいっそなしにしてしまう、という考え方が起こるのも理解できる。

しかし、そういうレンサ<sup>B</sup>を脱出すると、読む快楽に自然と目覚めてくる。

たとえば世界文学全集に加わっているゲーテの『ファウスト』とか、ドストエフスキの『罪と罰』のような有名な小説がある。名前だけは聞いたことはあるが手に取ったことはない「名作」というやつだ。なんとなく古臭い権威の象徴のようで、埃<sup>ほこり</sup>をかぶった辛気臭い<sup>しんきくさい</sup>小説ではないかと思える。ところが実際に読んでみると、これがけっこう予想を超えて面白いのだ。相性ということもあるから全てがそうだとは言いきれないが、一世紀以上も読み続けられたロングセラーというのは、それだけのことがあるのだと実感させられることが多い。あらずじで名作を読むといった早分かりの本が何種類も出ているが、その面白さはあらずじでは決して分からない。

読み続けているうちにミリョウ<sup>ウ</sup>される文章の個性、場面の温度やムード、作中人物のセリフや仕草の魅力、急スピードで場面が展開する興奮、そういった小説の醍醐味は、ストーリーの要約とはまったく別物である。それを身体ごと味わった経験こそが、自ら書く小説の養分になるのである。

「面白い小説」と一口に言っても、冒頭の一行から最後までずっと面白い、などということはまずない。どんな小説にも退屈だったり、読むのがちよつと苦痛な時間は存在する。こちらの健康状態や仕事の状態なども関わっているから余計である。

それなのに、どうして読むのが楽しいなどと言えるのか。

私が大学生のころに味わった経験をひとつ書いておこう。

スタンダー<sup>ル</sup>の『パルムの僧院』というとても分厚い長編小説を読みはじめた。たぶんきっかけは、有名な小説だから読んでおかねば、という義務感と、見栄のような気持ちがなくなかったと思う。ところがこれが読んでも読んでも退屈なのだ。十八世紀末の北イタリアの政治状況や貴族たちのことがえんえんと書かれている。デル・ドンゴ侯爵という人物が出てきてその息子フアブリスの成長ぶりが悠然と語られる。親を イ ヤンチャ息子で、フランス軍のナポレオンに憧れて、ワートルロ<sup>ー</sup>の戦いにこのこ出かけていく。なんと敵方に志願兵として加わるのだ。でもあまり歴史小説が好きでなかった私には、ここまで進んでもまだそれほど熱中できなかった。最初は坐<sup>すわ</sup>って読んでいたのだが、ベッドに横になって読むようになった。

色男のフアブリスはモテまくりである。ところが人妻との火遊びがもとで人を刺してしまい、牢獄に入れられるハメになる。ここで全体のちよつど半分くらい。興味はちよつともてるようになったが、まだ微妙<sup>じょうび</sup>。その城砦<sup>じやうがい</sup>の牢獄で、彼は向かいの建物の窓の鳥籠のところに毎日姿を見せる美しい少女クレリアを目にとめて、愛するようになる。彼女は城砦の將軍の愛娘である。

このへんから活字を読むのがもどかしいほど引きいられてしまうのだ。クレリアも次第にフアブリスに夢中になる。そしてある日、フアブリスが密かに毒殺されようとしていることを知った彼女は、父へのコウ<sup>ウ</sup>シンも聖母マリアへの信仰心も忘れ、フアブリスを救うためにスカート<sup>を</sup>を翻して彼のいる牢獄へと突進する。おとなしく煮え切らなかった彼女が、ついに情熱<sup>じやうねつ</sup>のオモム

くままに行動する瞬間である。このとき、私は本を手を持ったまま、興奮(三)のきわみでベッドの上を転がりまわっていた。その場面が全体でいうと、ほとんど四分の三のあたりなのである。

<sup>(四)</sup> ジェットコースターは初めゆっくりと坂道を登っていく。カタカタと悠長に登りつめる時間が、全体の半分くらいかかる。

そして一気に滑り始め、あとは最後まで走りぬく。もしも半分のカタカタがなかったら、あとの爽快感は ウ だろう。

それと同じように、前半で何度もめげかけながら読み続けたことが、この小説のものすごい興奮と感動の条件だったともいえるのだ。そういう種類の感銘があることを、私は『パルムの僧院』で初めて知った。

あるいは、十代から二十代にかけて何度読んでも退屈で読みきれなかった(五)谷崎潤一郎の『細雪』という大長編小説がある。これも三十代になって読んだときには、嘘のように頭にしみじみ文章が沁み込んできて、読み終えたら小説観も人生観も変わってしまうくらい大きな感銘があった。

だから小説を読むときは、退屈を エ 。退屈に身を任せているうちに、読者は思いがけない場所へ運ばれていくのである。どこへも連れて行ってもらえなかったら、不運なことにその作品がつまらなかったというだけである。できればベストセラ―や時めく話題の書ではなく、古典や名作や、あまり知られていないマイナーな作家の小説に挑戦してみてほしい。時間を費やして、労力を払って、自力でつかんだ感銘は一生色褪あせないものである。

(清水良典『2週間で小説を書く!』による)

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A ソジ

- ① ソシキに属する
- ② ソザツな仕事
- ③ ソボクな味わい
- ④ 計画をソシする
- ⑤ ソセンを敬う

1

B レンサ

- ① サコツを骨折する
- ② 薬のフクサヨウ
- ③ 事件をチヨウサする
- ④ 犯行をシサする
- ⑤ サガクを徴収する

2

C ミリヨウ

- ① 後部シヤリヨウに乗る
- ② 大宝リツリヨウ
- ③ リヨウキンを払う
- ④ ホンリヨウを發揮する
- ⑤ 報告をリヨウシヨウする

3

D コウシン

- ① 期末コウサ
- ② 情報がコウサクする
- ③ 立派なコウセキ
- ④ チュウコウを尽くす
- ⑤ コウソウビルを建てる

4

E オモムク

- ① 奨学金をフヨする
- ② 法令をフコクする
- ③ 子供をフヨウする
- ④ 現地へフニンする
- ⑤ 神仏をイフする

5

問二 空欄 ア ・ イ ・ ウ ・ エ に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ

一つずつ選ぶ。

ア

- ① 楽しい経験
- ② 未熟な教養
- ③ すばらしい感銘
- ④ もどかしい実感
- ⑤ 仕方のない義務

6

イ

- ① 喜ばせる
- ② やきもきさせる
- ③ しみじみさせる
- ④ おとなしくさせる
- ⑤ わくわくさせる

7

ウ

- ① 退屈する
- ② 半減する
- ③ 感動する
- ④ 認識する
- ⑤ 全滅する

8

エ

- ① 費やすのがいい
- ② 真似しなくてもいい
- ③ 実感しなくてもいい
- ④ 気にしたほうがいい
- ⑤ 恐れなくてもいい

9

問三 傍線部(一)「スタンダールの『パルムの僧院』とは、どのような小説であるか。最も適当なものを、次の①〜⑤の中から一つ選べ。

①冒頭の一行から最後までずっと面白い小説

②どこへも連れて行ってもらえない不運な小説

③読み終えたら小説観も人生観も変わってしまうような小説

④何度読んでも退屈で読みきれないような小説

⑤あまり知られていないマイナーな作家の小説

10

問四 傍線部(二)「もどかしいほど引きいれられてしまうのだ」の文法的説明として正しいものを、次の①〜⑤の中から一つ選べ。

① 形容詞 | 助詞 | 動詞 | 動詞 | 助詞 | 副詞 | 助動詞

② 形容詞 | 名詞 | 動詞 | 助動詞 | 助詞 | 動詞 | 助詞 | 助動詞

③ 形容詞 | 名詞 | 動詞 | 助詞 | 助詞 | 動詞 | 助詞 | 形容動詞

④ 形容詞 | 助詞 | 動詞 | 動詞 | 助動詞 | 動詞 | 形容動詞

⑤ 形容詞 | 名詞 | 動詞 | 副詞 | 助動詞 | 形容動詞 | 助動詞

11

問五 傍線部(三)「興奮のきわみでベッドの上を転がりまわっていた」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

12

- ① 退屈に身を任せているうちに、思いがけない場所へ運ばれていったから
- ② ベストセラーや時めく話題の書ではなく、古典や名作だったから
- ③ 名前だけは聞いたことはあるが、手にとったことはなかったから
- ④ 全体でいうと、ほとんど四分の三あたりまで読み終えることができたから
- ⑤ 有名な小説だから読んでおかねば、という義務感と、見栄のような気持ちがあったから

問六 傍線部(四)「ジェットコースター」とは何を譬えたものか。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

13

- ① 面倒な手続きを手つ取り早く済ます、という考え方
- ② 場面の温度やムード
- ③ あらすじで名作を読むといった早分かりの本
- ④ 時間を費やし、労力を払ってつかんだ興奮と感動
- ⑤ ベストセラーや時めく話題の書



問七 傍線部(五) 谷崎潤一郎の作品、および谷崎の属した文学思潮を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

【作品】

① 離合

② 城の崎にて

③ 草枕

④ 春琴抄

⑤ 潮騒

14

【文学思潮】

① 耽美派

② 白樺派

③ 自然主義

④ 写実主義

⑤ 新感覺派

15

問八 本文の内容にあてはまるものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

16

① 小説を書くのが目的の人は、その手前にある面倒な手続きを手つ取り早く済ます、あるいはいつそなしにしてしまうべきである。

② その人が書けるレベルは、読んだ経験のレベルとほぼ等しいのだから、教養や勉強のために読むべきである。

③ 読者がどこへも連れて行ってもらえないような不運な作品もある一方、思いがけない場所へ運んでいってくれる作品もある。

④ 冒頭の一行から最後までずっと面白い小説こそ、本当に「面白い小説」と言ってもよい。

⑤ 何度もめげかけながら読み続けることが、小説の興奮と感動を味わうためには必ず必要な条件である。

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

今年（平成二七年）は戦後 ア というので、各種メディアやジャーナリズムにおいてもさまざまな特集が組まれている。国会でも、集団的自衛権の行使を一定範囲内で容認しようとする安全保障関連法案が A シンギされ、戦後の防衛体制の一つの転換になるかもしれない。

戦後日本の「国」の基本的な枠組みは何かといえば、平和憲法と日米安保体制の下での経済発展の追求、という点にあった。特に冷戦時代には、日本はもっぱら米国との緊密な関係の維持によって、防衛問題からはできるだけ目をそむけ、ただ経済成長に まいしん 邁進する、という暗黙の合意があった。端的に え いえば、米国並みの豊かさを B キョウジュしたいという物的な欲望と、敗戦によって失われた名誉を経済発展によって取り戻すという精神上の自尊心とがあいまって、戦後日本をほとんど奇跡のような経済発展に向かわせた、というわけである。

戦後日本の経済発展には C 二つのピークがあった。一つは、一九五〇年代後半から始まった高度成長が七〇年代には頂点に達する。そして、二つ目は、八〇年代後半である。しかし、この二つのピークの性格はかなり異なっていた。

高度成長期においては、機械、電器、自動車などの製造業が経済を けんいん 牽引し、高速道路や新幹線などが建設され、地方へと流れたカネが土木や建設を通して地方を潤していた。人々は、たえず新しい電器製品を追い求め、自動車に手が届くと騒ぎ、新幹線の乗車体験はかけがえのない印象を与えた。この成長を支えたのは、爆発するような人々の欲求であり、別の言葉でいえば D フットウする大衆の消費意欲であった。

イ、八〇年代の日本経済を支えたものは、大衆消費というより、バブル経済といってよい。確かに、八〇年代半ばには一人当たり国内総生産（GDP）では米国に追いつき、電器製品も自動車も半導体も米国を超えた。しかし、そのことが米  
国からの日本への内需拡大要求をもたらす。このなかで、日本は金融緩和を続け、不動産と株のバブルを引き起こしたのである。

そして九〇年代ともなると、ほぼゼロ成長が続く。低成長経済に入ったのである。明らかに、六〇年代の高度成長期のような

大衆的な消費のフットウはない。八〇年代のバブル期のようなブランド品への熱狂という虚栄の消費も見られない。経済の在り方が変わってきたのである。

今日、政府は、医療やロボットなどを中心に新たな技術革新を生み出し、それを軸に再び成長経済を取り戻そうとしている。そこへ、地方ソウセイや女性の社会参加などが付け加えられる。しかし、これらの成長戦略によって新たな成長経済へ移行するとは考えにくい。いくら技術革新が新たな産業を生み出し、新たな商品をもたらしても、それに群がる大衆の欲望がなければならぬからだ。

六〇年代には、人々はまだ物的な豊かさを渴望し、米国的な生活モデルに憧れを抱いていた。しかも人口は増加し、ダンカイ世代はちょうど社会人になりつつあった。八〇年代には、そのダンカイ世代が社会の中軸に位置し、バブルが生み出すあぶく銭が虚栄心を刺激した。

しかし、モノに囲まれて生活している今日、われわれの欲望を大きく持続的に刺激する新技術はあるのだろうか。今日の若者たちを見ていると、実にウ。テレビも見ない。車にも無関心。新聞も読まない。ブランド品にもさして関心を持たない。ただただ、スマホがあれば一日過ごせるのである。

それを悲観するのは当たらない。ある意味で、日本の経済社会は、その程度にはエに達したのである。次々と市場に送り出されるモノに群がり、そこに幸福を得るという段階ではなくなりつつある。そのことは決して悪いことではない。しかも人口減少社会である。

こうした「現実」をわれわれはまずは認めるべきではないのだろうか。ア たって、経済成長をほとんど唯一の共通価値にしてきた「戦後」はそろそろ終わらせるべきではないだろうか。防衛問題、日米関係もすべて含めて、そろそろ「ポスト戦後」の構想を描くべきときなのである。

(佐伯啓思『「ポスト戦後」の構想を』による)

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を使うものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A シンギ

- ①キンシンを命じる
- ②シンシヨウ棒大
- ③シンビガンをみかく
- ④ケンシンの態度
- ⑤シンサンをなめる

17

B キヨウジュ

- ①キヨウアクな犯罪
- ②天気ガイキヨウ
- ③キヨウジュンの意を表す
- ④キヨウタンすべき事実
- ⑤キヨウネンは八十歳だった

18

C フットウ

- ①孤軍フントウする
- ②前人ミトウの快挙
- ③貧血でソットウする
- ④地価がコウトウする
- ⑤戸籍トウホンを請求する

19

D ソウセイ

- ①シンソウを究明する
- ②ソウサク意欲が湧く
- ③シンソウの佳人
- ④時期ショウソウ
- ⑤ジョウソウ教育を重んじる

20

E ダンカイ

- ①キンカイを手にする
- ②オンカイを奏でる
- ③話をキョツカイする
- ④可能性はカイムだ
- ⑤キカイな現象

21



問四 傍線部(一)「二つのピーク」とは具体的にはいつのことを指すか。正しいものを、次の①～⑥の中から二つ選べ。

28 . 29

- ① 第一のピークは戦後直後に始まり昭和三〇年代半ばに頂点を迎えた。
- ② 第一のピークは昭和三〇年代から始まり昭和四〇年代半ばに頂点を迎えた。
- ③ 第一のピークは昭和四〇年代から始まり昭和五〇年代半ばに頂点を迎えた。
- ④ 第二のピークは昭和五〇年代半ばから昭和の終わりにかけて。
- ⑤ 第二のピークは昭和六〇年代から平成の始めにかけて。
- ⑥ 第二のピークは平成の始めから平成一〇年ころにかけて。

問五 この二つのピークに関連することがらとして最も適当なものを、次の①～⑥の中からそれぞれ二つずつ選べ。

【第一のピーク】

30 . 31

【第二のピーク】

32 . 33

- ① 不動産や株のバブルが引き起こされた。
- ② 米国的な生活モデルへの憧れがあった。
- ③ 若者たちはスマホさえあれば一日過ごせる。
- ④ ブランド品への熱狂という虚栄の消費があった。
- ⑤ 低成長経済に突入した。
- ⑥ この成長を支えたのは大衆の消費意欲であった。

問六 本文の内容と合致するものを、次の①～④の中から一つ選べ。

34

- ①戦後一貫して経済成長をほとんど唯一の共通価値にしてきたが、今後とも成長戦略による景気回復の取組みにより、この体制を維持すべきである。
- ②戦後日本が奇跡的な経済的発展を達成できたのは、米国との緊密な関係の維持により防衛問題から目をそむけることができたからである。
- ③戦後の日本経済は、国民の消費意欲による高度経済成長、虚栄の消費によるバブル経済を経て、現在に至るまで着実に成長を続けている。
- ④現在、国会で集団的自衛権の行使の容認について議論されているが、基本的な枠組みとして現在の平和憲法を中心とした体制を維持すべきである。